(12) 『源氏物語古注釈叢刊第五巻』（武蔵野書院）所収。
(13) 金子金治郎氏『連歌古注釈の研究』（角川書店）所収。
(14) 金子金治郎氏編『連歌古注釈集』（角川書店）所収。
(15) 桂宮本叢書『第十八巻　連歌一』所収。
(16) 注(15)掲書に所収。
(17) 注(13)掲書に所収。
(18) 桂宮本叢書『第十九巻　連歌二』所収。
(19) 注(14)掲書に所収。
(20) 注(15)掲書に所収。
(21) 岩波文庫『連歌論集下』所収。
(22) 注(14)掲書に所収。
(23) 注(18)掲書に所収。
(24) 『心敬集　論集』（吉昌社）所収。
(25) 定本丹鶴叢書十一～十四巻『草根集』（大空社）。
(26) 稲田利徳氏『正徹の研究　中世歌人研究』（笠間書院）参照。
(27) 稲田利徳氏「室町期の和歌における連歌的表現 ―連歌師の和歌を中心にして―」（『連歌と中世文芸』金子金治郎博士古稀記念論集編集委員会編角川書店）参照。
(28) 伊井春樹氏「歌合と源氏物語」（『源氏物語　注釈史の研究』桜楓社）第二部第二章第一節参照。
(29) 「前摂政家歌合」「素純百番歌合」は『続群書類従』15輯上、「文明九年七月七日七番歌合」は『群書類従』13輯所収。
(30) 『日本歌学大系』5所収。
(31) 宮内庁書陵部蔵
(32) 「後土御門天皇御集」「柏玉集」「雪玉集」私家集大成六所収による。

貴重な資料の閲覧と翻刻掲載をお許し下さいました国会図書館、また貴重な資料の閲覧をご許可賜りました図書館・文庫に厚く御礼申し上げます。

（二〇〇一年九月五日受理）
（あだち　けいこ　文学部助教授）

格性に何ら疑いをもたれてはいないのである。

和歌が既に源氏詞を取り入れていたにせよ、源氏詞を自由に縦横に使いこなすには正徹を例外としてやはり連歌を待たなければならなかったと考えられる。連歌特有の付合の変化のため源氏詞はその固有の物語の文脈、場面を背景に持ちながらそれに拘束されない新しい用語として自立することが可能であったからである。また、和歌は一旦連歌詞として洗礼をうけた源氏詞を用いることによって、本来の物語的情趣をとどめながらも「さながらそのまま」ではない趣向をもたらすことができるようになったのではないだろうか。大永元年の数十日間に集中的に催された源氏詞連歌は特に連歌に限定されることなく和歌をも含む、堂上歌人達の源氏詞訓練の営為であったと考えられるのである。

けれども、やがてこうした和歌及び連歌における言語表現の可能性の追求という源氏詞の意義は忘れられ、

『清水宗川聞書』

一、源氏に出たる詞之類、歌に成さうなるは皆用也

などの安易な意識で用いられるようになっていく。ちなみに『源氏作例秘訣』（東北大学狩野文庫蔵）という歌書があるが、これは江戸中期以降の成立で、新古今集の他主として三玉集から源氏物語の表現を用いた和歌を書き抜き編纂したものである。文明・大永の二つの源氏詞連歌の源氏詞と共通する語を以下にあげておく。

詠格詞寄

風ふきとほす　霞のまより　竹の垣　よもの嵐を聞給

月いれたる槙の戸　月の顔のみまもられて　浪ここもと

口おしの花の契りや　舟みち　あまの家たにまれに　雪

はつかしく　品にもよらし

〈注〉

(1) 文明十四年六月源氏物語の詞にて侍し御独連歌に

1001 紅葉、のみたりかはしく風ふきて　御製（巻第五秋連歌下）

ほろ〳〵とおつる木、のした露

文明十四年六月源氏物語の詞にて侍し御ひとり連歌に

1550 こまやかに又あふ事をかたらひて　御製（巻第八恋連歌上）

返〳〵もしたふわかれ路

文明十四年六月源氏物語の詞にて侍し御ひとり連歌に

1759 み、かしかましあまのさへつり　御製（巻第十四雑連歌二）

釣舟の数まさりゆくすまの浦

（貴重古典籍叢刊4『新撰菟玖波集　実隆本』）所収。

(2)『源氏物語受容史論考　正編』（風間書房　昭和59年）所収。

(3) 伊井春樹氏「連珠合璧集に見られる源氏寄合」（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社）第二部第一章第六節参照。

(4) 史料纂集『十輪院内府記』「文明十四年二月一日　参午前読源氏早蕨」他。

(5) 伊井春樹氏「甘露寺親長の源氏物語竟宴歌」（『源氏物語注釈史の研究』第二部第二章第二節参照。

(6)『続群書類従』補遺3。

(7) 続群書類従完成会。

(8) 新訂増補史籍集覧3。

(9) 国会図書館『連歌合集』、陽明文庫『古連歌異躰』に所収。

(10) 岩波古典大系『連歌論集　俳論集』所収。

(11) 中世の文学『連歌論集二』（三弥井書店）所収。

『後土御門院御集』[32]

1　尋花

山ふかみしはふる人の分けならす道をしるへに花やたつねん　（文53）

2　千鳥

あま人になれすやすまの浦千鳥さとはなれたる方に鳴也　（文66）

3　夕鹿

暮れぬとて山よりいつるほとならしたゝこゝもとに鹿そなくなる　（文55）

4　月前風

あらましく風は吹とも久かたの月のかつらの枝はならさし（文54）

5　文明十三年十二月庚申五十首に同じ心（疎屋夕顔）を

夕かほの花のちきりもいつよりかしつか家ゐかれははつへき　（文91）

『柏玉集』

1　花雲

花さかり山かさなれるかけもいさこゝにさくらのくものうへとて　（文52）

2　水鳥知遅

我が袖の外にやはみん水鳥の羽うちかはす池のこゝろは　（文69・89）

3　恋不依人

見すや人品にもよらしとはかりに身は一きはの思ひある世に　（大57）

4　寄河恋

とへかしな物おもふ袖のおきふしに川そひ柳たへんものかは　（大9）

以上の例からは連歌と和歌との源氏詞の用法の相違はほとんどみつけがたい。

また、他の連歌師、歌人の詠歌においても

『春夢草』

萩露

野分たつ夕は露の玉の緒も花にをしまぬ萩のうへ哉　（大60）

稀恋といふ事を源氏物語の詞にて読むへきよし侍りしに

おもはしよ七夕はかり待えてもうき身にあまる夜半の名残に　（大36）

『雪玉集』

橘

きのふかも吹くや桂の追風にむかしに匂ふ軒のたち花　（大88）

などは、「源氏物語の詞にて読むへきよし」という指示の有無と和歌の詠み振りにはほとんど関係がないのである。少なくとも大永連歌がうまれた土壌では源氏詞は連歌、和歌双方において詩歌語としての適

詞の侍しやらむ

「文明九年七月七日七首歌合」　十一番右

おらは落とらはけぬとも萩か枝のつゆ外にみん花の色かは

折は落ぬへき萩の露。源氏物語の詞には侍れと詞のつゝきいかにそや聞え侍る。つゆほかにみんもよろしからさるにや。

「素純百番歌合」　二十番左

色も香も外のちりなん後にとやをしへし宿の花の一本

花の宴の詞さなから出来たり

六十六番左

雪あられはるる日も見ぬよもきふに思ひやらるるこしの白山

左歌、源氏物語の詞さなからそのままのやうにみえたり[29]

たとえば、享禄三年（1530）「素純百番歌合」二十番左の判詞にいう「花の宴の詞」とは

花ざかりは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、おくれて咲く桜二木ぞいとおもしろき。（花宴　二―59）

を指し、まさに原典本文の表現にあまりにも細部まで密着すぎていて「さなからそのまま」の評言は詠者に工夫のみられない批判の辞となっている。（六十六番左と両者とも持）

同時に、室町期には歌論においてもそれまであまり例を見なかった源氏物語の詞（地の文）のみについての言及が散見されるようになる。

『清厳茶話』

一、本歌にとる事　草子には源氏のことはいふに及ばず、古物語とる也・・みな歌をも詞をもとるなり[30]

『師説自見集』

一、和歌事、一向風情計にては不叶カ、仍自見等中に詞のよせありぬべき事、又はめづらしき詞等を書付けて、朝夕目なれば、おのづから詠歌の力たるべしと存て、反古の裏などに注付たる事共を、此六帖（＝源氏六帖抄）に書きあらはしたる也、是こそ自のためなるべけれ。[31]

源氏の詞を和歌に積極的に取り込む風潮が連歌にも影響を及ぼしたと考えるのがおそらく妥当なのであろうが、室町中期以降連歌によって開拓された用語が逆に和歌に侵入していくようになる動向の中で、本来は厳しく区別された連歌詞と和歌詞の境界を越えることが最も容易であったものが源氏物語の詞だったのではないだろうか。ただし中世の歌合の判詞からは、上記の例の如く源氏物語の詞を用いるにしても、用法のうえで一定の条件があり、また源氏の言葉であれば無条件で容認されるというわけでもなく、総じて和歌は連歌に比較すると源氏詞の使用については制約が厳しかったことがうかがえる。その点で、正徹は特異な存在であった。

さて、そこで後土御門天皇と後柏原天皇の詠歌における連歌と共通する源氏詞の用例を参照してみると、

15　五月十九日大光明寺の月次に　夏草（当座）　巻八

日数へむ草のは山はかさなりて夏は分へきむさし野もなし（文52）

16　九月十日ある所にて読みしに　谷樵夫　巻十一

せくとなき谷の水おち音絶てわたりつつける柴ふるひ人（文53大11）

17　長禄元年三月二十日草庵の月次に　浦春曙　巻十三

霞むよの花に枕をそはたてて曙しらぬすまのうら人（文87大91）

18　六月二十日草庵月次に　納涼　巻十三

滝のもとよりゐる岩は水よりも身にとほる迄さゆる夏哉（文90大4）

19　九月十三日草庵二十日會四月分火事によりてなかりしを沙汰し侍る　被厭恋　巻十三

うらめしやみるめ合せしかよひちをわさとちかへてしらすかほなる（大48）

20　十月十日草庵月次に　寄海人恋　巻十三

人そあらぬ千尋の底の心まて引くてにみゆる蜑のたく縄（文56）

正徹のこのような詠みぶりは同時代の中で突出している。とりわけ八番目の和歌、歌語「駒いばふ」ではなく「馬いばふ」であることは非常に興味深く、これは源氏詞を典拠にするのでなければ到底容認しがたい表現であろう。逆にいえば源氏本文を出典とすることによって「馬」が散文の枠を越え詩歌語となり得たのである。（大永連歌においても事情は同断であろう。）連歌は和歌に比して語法、用語ともかなり自由な表現が容認されておりその一つがもともと世俗言（八雲御抄）である物語詞の使用であった。正徹の和歌はしばしばきわめて連歌に近い題材・素材を取るといわれるがここでもその一端がうかがえるのである。[26] むろん、鎌倉期より源氏物語は歌道の聖典として多くの歌人たちが源氏物語に依拠した和歌を詠んできた。けれども、源氏を詠作に用いる際には、基本的に物語中の和歌の表現や情趣を本歌取りすることが中心であった。正徹のように、地の文の一部を断片的に切りとり、本来の文脈・情趣から独立させて用いる「連歌的用法」はやはり異色である。

一般に和歌の表現が連歌に取り入れられていく方向のなかで、時として連歌詞が和歌に逆に流入していく事例が、主に連歌師の詠歌にみられることが指摘されており、[27] そうであれば正徹が連歌師達と交渉が深かったことも源氏詞連歌の先蹤のごとき源氏詞の使用と関わっているのかもしれない。

ただし、和歌の源氏物語受容についても、嘉吉三年（1443）の前摂政歌合の頃からそれまでの本歌取、内容取から地の文（物語詞）を用いての詠が増えてきており、連歌と同じくその傾向は時代が下るにつれて顕著になっていくのである。[28]

「前摂政家歌合」　百四十一番左

山あひにすれる衣のたけのふしいくよになりぬかものみかつき

源氏若菜巻住吉詣のことに、山あひにすれるたけのふしとかける

（四）

さて、室町期の和歌と源氏詞の関係に目を転じると、まず正徹において源氏詞の使用が極端に顕著であることに気づく。試みに文明、大永の源氏詞連歌と一致するものに限って以下に掲げる。

『草根集』[25]

（傍線部が源氏詞。文は文明連歌、大は大永連歌の略称。）

1　そのころ北野の松梅院の女方より梅の花ふくろに花をおりそへて
　おくられ侍るに
　咲く梅の春の手向のぬさ袋けにたくひなき色そ籠れる（大66）　巻二

2　六月二十日阿波守家の月次三首に　夏夜待風
　中川の宿のひさしのこすのまに風吹きとほせ夏の夕やみ（大51）　巻二

3　永享五年正月八日草庵の月次三首に　蛍
　あつめおけ窓の蛍も九の枝のひかりそことのはのはな（大55）　巻二

4　正月二十六日阿波守の家の月次に　池辺松久
　庭ひろき池の心のちりもなし松にやよよの年つもるらむ（文89）　巻三

5　永享六年正月十二日草庵月次三首に　山家灯
　此山の陰のともし火消ぬよもあらしの窓に竹あめる垣（大40）　巻三

6　深山泉
　岩かくれ浪こす山の滝のもとよりこぬ夏をはらふ白玉（大4）　巻四

7　河千鳥
　友千鳥川瀬の玉もかりそめにはね打ちかはし別れてそなく（文69）　巻五

8　偽恋
　うらもなく思ふわか身や偽のある世にそむく心成らむ（大37）　巻六

9　旅
　馬いはひにわとりなきてたひ人の出立声そ里にあまれる（大7）　巻六

10　水郷
　身は夢そ宇治の橋姫わすれねよむかひの寺の鐘に待つ夜を（文42）　巻六

11　卯月十一日或人諸神法楽とて百首よみし中に　郭公稀
　時鳥ときに一たひ咲く花にきかまくほしき声の色かな（大67）　巻七

12　九月十七日兵部少輔の家の月次に　尋在所恋
　かねて入る槙の戸口の月にたにしらす心のをかのへのやと（大13）　巻七

14　卯月四日刑部大輔家の會に　林首夏
　白妙も茂る林にかくろへてかふるか夏のさきの毛衣（文79）　巻八

かのゆふかほの宿にかたらへる八月十五夜月あきらかにしろたへのきぬたの音なと、さやかなりしこととともを、[21]

源氏物語本文についてのこうした通暁ぶりは記憶のみに頼ったものとは考え難く、特に時代が下ってはおそらく前掲した如き、本文を抄出した抜書集に依ることが多かったのではないだろうか。

『愚句老葉』（版本）

世々の末にはうまれすもかな
身を秋の落葉をたれかひろはまし

（自注）　腹の別なるをは落胤腹といへり。源氏物語に、あそんや、其落葉をたにひろはんや、と侍る。それより此の宮を落葉と申すなり。

（後人注）　私云、物語の詞ハ近江の君を弄しての給ふ所の詞にや。常夏の巻にや、落はの宮の事ハ、もろかつらの歌よりみえたるにや、若菜の巻か、両注ともに相違か、古人の注釈に中々此類おほし。

『紫塵愚抄』をはじめとする連歌の実用書に限らず、源氏物語の本文抄出は、早くに成った正徹の『源氏物語歌双紙』を別にすれば、やはり宗祇以後から世に珍重盛行されるようになった。

『実隆公記』

文亀三年三月十九日条

自伏見殿源氏詞御所望二枚鳥子書進上之

永正三年四月五日条

甘露寺（元長）所望之源氏詞哥等書之

永正六年二月四日条

抑御手本二源氏詞　先日申入之處被染宸筆（後柏原天皇）
今日被下之則一巻下遣今川許　一巻遣朝倉妻也

永正八年十月十一日条

甘黄（甘露寺元長）来臨　越前（朝倉貞景）所望源氏詞料紙並短冊等被携之

同年同月十二日条

越前所望手本源氏詞若菜上　ふしまち月云々　書之

大永三年六月二十七日条

伊勢守（伊勢貞孝）所望料紙源氏詞書遣之

大永八年四月十九日条

周桂所望色紙三十六枚　新朗詠四季書之　鳥子巻物源氏詞各則遣之

屏風絵などに添える場合もあったであろうが、しかるべき手跡による源氏物語の抄出本文即ち源氏詞が源氏物語そのものとして価値を持ち、いかに人々に求められたかを右の諸例からもうかがうことができよう。

とはさらめやの暮も露けし

心のむすほゝれたる故に、とはんとおもふ夕も、泪の落る心なり、露けしとは、泪の心なり、源氏にいへり。[20]

連歌の典拠としての源氏物語はますます重視される一方で、従来のありふれた陳腐な寄合は忌避され、連歌師の古典研究と結びついた目新しい付合が要請されていた。その方法の一つが本文そのものへの密着であったと思われる。

「矢嶋小林庵何木百韻」

本歌本説物語の心、其心〻〻の趣向一やうにあらす、心たにかはり侍らは、不可及斟酌云々、けにも古来いか斗かは取りつくし侍らん、いつれもはゝかり侍らはあき所なかるへし、されとも人の耳口にある名句、又心もことはも似過たらん様ならんをはいかにも可懼とそ。

『當風連歌秘事』

源氏物語は大部の物にて侍れば、同巻なりとも心持さへ相替ば、三句も不苦、惣而面に源氏とさし出て聞こえずば毎句にてもつかふまつるべしと逍遥院殿様、祇公、載公なども被仰し事なり[21]

したがって、連歌の理解・鑑賞にも源氏物語原典に通暁することは連歌師にとっては必須の条件であった。

おさまれる時ありてみないつる世に

たたうとんけの君あふくなり　（『春夢草』）

右の付合に、内閣文庫本『春夢草注』（肖柏からの聞書）は、

優曇花ハ今輪王出世の時咲といへる花也、賢人聖人ハ世の乱にハ、山なとへ蟄居して、明王の御代にハ出世する也、如優曇鉢花時一現耳の心也、源氏鞍馬へおハしたる時僧都のよめる哥、

うとんけの花まちえたる心ちしてみ山さくらに目こそうつらね[22]

と、最少限の典拠の指摘にとどまるが、書陵部桂宮本『春夢草』（注者未詳）では、

源氏物語にうとんけの事をいへる詞に、時ありて一度ひらくるはかたかめるにとあり[23]

とあり、僧都の歌に対する光源氏の言葉をそのまま引用し前句の表現の典拠としている。この注の内容なしには源氏物語を踏まえた肖柏の意図は十全には理解できないであろう。これまでの事例に限らず、宗祇以降の連歌注には源氏物語の本文がほぼそのまま引用される例がしばしば見られ、たとえば宗祇以前の心敬の自注と比較するとその相違は歴然としていた。

内閣文庫本『春夢草注』

世わたる人のあかつきのこゑ

やとりする小家ハちかき道のへに

源氏の五条わたりのゆふかほのやとりにとまりたまひし夜隣の人暁めをさまして渡世の事わひし事、あないとさむしや今年こそなりハひにも頼む所なくゐ中のかよひもおもひかけねは心ほそしや、なとゝ云詞あり

『岩橋』下（本能寺本）

ゆふかほの花にやつれしやとりをも忘れぬつまにうつ衣かな

「大永七年正月十八日矢嶋小林庵何木百韻」（宗牧注か　桂宮本）

墨染のね覚に露の袖かけて
めもくるゝにや月そかなしき

此の一句涙にてはなし、月をかなしむ、見るめには月もくらき心ちするやう成へし、前句による所此の世を思ひはてたえはやのね覚は、一かたならぬ露けさなるへし、女三宮、あまにならせ給へりし比、御そ奉るとて、墨染はうたてめもくるゝ色にてと、女房衆申たる詞のよせなり[15]

注がなければ、一見しただけでは源氏本文が典拠と理解するのは難しいのではなかろうか。

「宗長連歌自注」（桂宮本）

筆につくすをあはれともみよ
海山もたためのまえはふかからて

彼わらはやみのなくさめに色々の事有し中、ゑのことにこれはあさくそ侍らん、人の国の海山をみ給はは、御ゑいとあからせ給はんのよせにや。[16]

「十花千句注」（橋本公夏注　太田本）

言の葉もいさきよきをしすかたにて
ちりもつかしと身をおもふ人

帚木巻、かたちきたなけなく、わかやかなる程のをのかししは塵もつかしと身をももてなし、文をかけとおほとかにこといりをしつつ、すみつきほのかに心もとなくおもはせ、雨夜のしなさため馬頭の詞也。[17]

前句の表現を源氏物語本文を踏まえたものととりなし、付句においてその場面の本文を典拠としてそのまま用いている。したがって鑑賞の際にも、句の表面には直接出てこない物語本文を典拠として念頭においていないと十分に理解できなくなっている。しかもその出典本文のかなり細部の表現が取られており、きわめて技巧的な付合となっている。

また、特定の場面を典拠としない、物語中にしばしば出てくる表現も源氏詞として用いられている。

「春夢草発句」（注者未詳　桂宮本）

世をこめて咲くや初花朝かすみ

源氏に世こもれるといへる言おほし。行末遠き心也。世をこめたる人なととあるも末遠く若き人の事なり。[18]

「春夢草注」（肖柏門人注　太田本）

ゆるし色に咲ともおらし宿の梅

紅紫の二つ禁色とてゆるされなくては着せぬ色也。薄紅をはゆるし色とておおかたの人もゆるさる色なり。ゆるし色源氏物語にある詞なり。[19]

「永正八年夢庵独吟何路百韻連歌注」（自注乃至宗碩注　桂宮本）

理のうちに心はむすほゝれ

『長六文』

源氏の物語を寄合につかふまつる事、常の事候。但、彼物語不知人はおほく仕り違ふ事も侍り。・・・五条の三品は、源氏見ざらん歌読は無下の事なりと申されたれば、連歌も同事なるべし。・・・乍去能々殊勝の事なればこそ、俊成卿もかやうに申されけめ。さるまへは、いかにも此物語に心を染めたらん好士は能々と聞召して、たたずまゐ御存知可有候哉。[11]

こうした立場に基づいて作成されたのが源氏物語の和歌のみならず地の文をも含んだ、梗概書ならぬ抜書集であった。

『紫塵愚抄』序文

此物語五十四帖のつくりさま心のみなもと遠くなかれ詞の花ねさしふかく匂ひていつれをすていかなるをのこすへき事には侍らす予年久しくおもひ入みちなから老のなみにおほれ山の井の水にしつみて一部を見ることかたきゆへに四につゝめて三か一をかたとれり　物を抄する事人の心さま〳〵にしてかならすとすへきことはり侍らぬにや　しかはあれと閑家のなくさめとしてある世のうちは墨の袖にたつさへなき世のすゑにはむらさきのゆかりともみる人侍れかしとて巻〳〵のなかを塵はかりつゝをろかなる心にさかせて抜出侍れは紫塵愚抄と是をいふなるへし[12]

青表紙本の本文をほぼ忠実に抄出した『紫塵愚抄』に続いて宗長の『紫塵残抄』（長享二年1488）が編纂され、肖柏の『源氏花錦抄』（延徳三年1491）、兼載の『源氏一部抜書』など当代一流の連歌師達によって次々と源氏本文と和歌の抄出集が作られた。さらに、巻毎の抄出集『源氏物語之詞並歌抄出』、『源氏之詞』（宮内庁書陵部蔵）などの他、物語本文を名所別に編集した『光源氏物語内連歌付合』『源氏物語内名所寄合』や、植物、動物、雑部など作句のために題材の項目別に分類した『源氏詞要』（「歌書集成」の内、旧高松宮蔵）が室町中期から末期にかけて盛んに作成されたのである。しかも、これらは初心者向ではなく、ある程度源氏物語の内容を把握していてことさら注記なくとも原文抄出のみでその場面を理解できる読者のためのものであった。またそれに対応するかのように連歌の実作でも源氏物語原典そのままの表現を用いる例が、宗祇の頃から頻繁にあらわれてくる。正徹や兼良が源氏物語を読む人が少ないことを嘆いた頃とは随分状況が変わっていたのである。

「三島千句注」（実隆注　書陵部本）　傍線は稿者による。

春よまてちる桜あれは遅桜

源氏に散さくらあれは今ひらきそむるなんとさまさま見わたして

と云詞をもつてしたてたり。[13]

「愚句老葉」（版本）

よろこひの眉をはいつかひらかまし

夕顔かかるわひ人の宿

（宗祇自注）彼巻にや、をのれひとりゑみの眉ひらけとあれは、おもひよれる也。[14]

宗祇の付合は明らかに寄合書ではなく原典の本文を踏まえてのものであるが、宗祇以後、その踏まえ方はさらにより巧妙になる。

午後令参候　頃之参御前帥卿（三條西公条）令候之　萬葉連歌事等有勅定

同月十八日

御前参内　有御連歌　被籠萬葉集詞了　百韻了　更五十句　此間　御盃参

同年九月三十日

盡御會御連歌萬葉詞有之云々　民部卿入道（上冷泉為広）中御門大納言・四条中納言（隆永）等令祗候云々　入夜参竹園（貞敦親王）有御連歌　被籠源氏詞了　五十韻了　令退出　聊依有所労也

同年十月六日

御前参内　有連歌御會　万葉集詞也　分人数　二百韻有之　各七人也　予親王御方々也

『二水記』にある記載以外では大永元年十月六日の「伊勢物語詞百韻」（和歌からも地の文からも取る。天皇以下十二名）、新古今集詞連歌（大永三年三月十八日、天皇以下十名）などの作例が現存し[9]連衆は天皇をはじめ大部分が重なっている場合が多い。

それにしても大永元年九月十三日から約二十日間に四度も内裏や貴族の邸宅で源氏詞連歌の会が催されているのは尋常ではない。万葉集においても同様である。この種の連歌が大永元年から二年間のうちに集中的に見受けられるのは、これらが単なる座興からではなく、きわめて明確な目的があり計画的に興行されたことを物語っている。おそらく後土御門天皇個人の一回的な試みであった文明連歌と、数度繰り返されたに違いない源氏詞連歌の一つ、大永連歌との相違はいったい何に拠るのだろうか。

（三）

まず、連歌に関して言えば、この四十年の間の宗祗の存在が大きい。宗祗は中世連歌を完成させたばかりでなく、一流の古典学者として彼の影響力は絶大であり一介の連歌師ながらそれは内裏にまで及んでいた。宗祗に至って連歌の古典受容、特に源氏受容は新たな局面を迎えたと考えられる。それは、連歌の源氏取りが梗概書や源氏寄合に安易に依拠するのではなく、物語原典の表現や場面あるいは情趣の正確な理解に基づくものでなくてはならない、という基本的態度ではないだろうか。

『吾妻問答』

かの物語（源氏物語）は、昔より是を歌人もほめたる物なれば、連歌に取りて付くる事、尤もの事に候。さりながら、あるはみずから見、あるは聞き取るばかりにて、寄合にせんこといかゞと覚え侍るなり。又、当時此の物語に深く心を得たる人、誰かは多く侍らん。只古人の付け来たる様などを聞くばかりにて、付くる事多かるべし。[10]

は『新撰菟玖波集』以外には見あたらない。

『御湯殿上日記』

文明十四年六月二十一日条

御かたにての御月なみの御連歌あり。ふしみ殿御とうにて色まいる。くわんしゆうしの中納言ゐ中よりのほりて。御宮けにすきはら一そく。御こかたなまいる。

文明十四年六月二十二日条

（記載なし）

文明十四年六月二十三日条

かうしんにて御むろ　ふしみ殿　くわんしゆし殿　御そうたちなと入りまいらせて夜一よ御あそひあり(6)

応仁の乱後、古典復興期のこの前後、他に同種の作品もまた見あたらない。文明十四年の独吟源氏詞連歌は後土御門天皇の連歌愛好と源氏物語愛好が結びついた一回的な試みであったようである。

ところが、大永の源氏詞連歌になると事情は全く異なっていた。後柏原天皇をはじめ親王、廷臣あわせて十二人の連衆が参会した百韻というばかりでなく、この連歌会は宮廷で広く知られており注目もされていたようである。

『実隆公記』

大永元年九月十三日条　今日源氏詞連歌□(7)

『二水記』

大永元年九月十三日条

午後参内　明月有御連歌會　百韻悉被籠源氏詞訖　此後有御盃酌事及美聲了(8)

この一座に参加していなかった貴族の日記に記されていることからして文明連歌の場合とは対照的である。しかも源氏詞連歌の試みはこの時期頻繁に繰り返され、またその対象は源氏物語だけにとどまらず他の古典、万葉集や伊勢物語などにも及んでいたのである。

『二水記』

大永元年九月十九日条

有連歌御會　今日又源氏之詞也本帖與宇治十帖左右相分

御製宇治方　中書君（貞敦親王）本帖方　左右各七人也　申終剋果了

同年九月二十五日条

山科（言綱）月次會如常　頭人院廳也　百韻籠源氏之詞

同年十月七日条

午後向中御門（宣秀）亭　有連歌會籠源氏之詞了　及深更の間宿此亭

大永二年五月十三日条

巳終剋参内　有御連歌　被籠萬葉集句了　申剋各令退出了

同年同月十六日

が経過した一人の人物の対照的な姿でありながら、やはり同じように醜いのが滑稽な哀れを強調している。75が秋の句であるのに「雪」をだすのは源氏詞による出典の裏の付合の対比を求めたからであろう。ただし76が源氏詞を75と同じ箇所から選んだ為に、続く付合が単調になったことは否めない。

以上の例はいずれも、表面の付合とは別の次元での源氏詞による裏の付合である。このような巧妙な選択が可能であるのはその出典の場面や文脈を相互によく理解しているからこそであった。大永連歌の連衆が、文明連歌以上に源氏物語本文に通暁していたことはいままでの例からも明らかである。しかも大永連歌の源氏詞は、文明連歌と比べても旧来の源氏寄合と共通するものが少なく、逆にそれまで殆ど取られたことのない場面や表現を出典とする例が目立つ。原典のまとまった分量の文章に対する習熟ぶりとあわせて、大永の百韻からは中世連歌における源氏物語取りの、新たな段階への進展が鮮明にうかがえるのである。

(二)

文明十四年の源氏詞連歌から大永元年の源氏詞連歌までに四十年の歳月が経過し、その間に源氏物語の原典重視の傾向は際立ったものとなっていったが、そうした背後にはこの期間の純正連歌の動向が大きく関わっていると考えられる。ただし、それに触れる前に二種の源氏詞連歌が成立した背景を確認しておきたい。

そもそも、百韻各句に特殊な賦物をとる異体連歌は鎌倉時代から既に登場していたのであるが、源氏詞連歌に先だって注目されるのは、康正二年（1456）山名の家臣、金沢下野守入道源意の独吟、一条兼良の序文と合点をもつ『異体千句』中の「賦源氏伊勢物語歌詞連歌」である。源氏物語と伊勢物語の和歌が交互に詠み込まれ地の文からはとられてはいないものの、それまでの源氏国名連歌のように巻の名だけ詠み込んだものにくらべれば、源氏物語そのものへの親密度は格段に深まっている。地方在住の武士によるつれづれの慰めの吟詠にこうした連歌がうまれたのは、兼良との親交といった事情をさしひいても、従来の寄合に依らない原典重視の風潮が高まりつつあったことを反映しているのである。(3)

さて、「文明十四年六月二十二日御独吟源氏詞連歌」が成立した前後の動向としては、まず文明十一年頃から内裏で月次連歌会が催され後土御門天皇の愛好もあって内裏連歌はきわめて盛況であった。応仁の乱が文明九年に終息した後、都には古典文芸復興の兆しが強まっていた。既に文明四年に成立していた『花鳥余情』は同十一年に献上本が作られ、地下では宗祇による古典研究、就中源氏研究が本格的にはじまっており三条西実隆らも聴聞に訪れている。十二年には『肖柏問答抄』が成り、十三年からは中院通秀が内裏や宮家で源氏講釈を開始して十四年には宇治十帖まで進んでいる。(4) さらに十七年には宗祇が実隆に源氏講釈を行い、十八年の源氏物語五十四帖書写の完成を記念して行われた甘露寺親長の源氏物語竟宴和歌には、後土御門天皇が桐壷、蓬生、宿木三巻の源氏目録和歌を寄せている。(5)

こうした状況のもと、源氏詞連歌についての記事は管見のかぎりで

の玉葛と乳母一行の筑紫下りの場面が呼び起こされる。94の「心細し」はきわめて一般的な語彙であるけれども、94の出典箇所と隣接したところに「船路」の語が存在することによって玉葛巻の当該場面を物語詞の出典と特定できるのである。逆に言えば「船路」という源氏詞によってこの行文が導き出されたからこそ、ありふれた「心細し」が源氏詞となり得たとも言えよう。

こうした源氏詞選択の方法が最も明確に看取できるのは86から89にかけての付合である。

86　はれまめつらし五月雨のころ
87　若かえてかしわきしけるかけふかみ
88　ちかきかつらのをひかせもよし
89　この夕出たる月の花やかに

86と88が花散里巻、87が胡蝶巻を出典とする。初夏の夕、雨後の清爽と薫風を共通の情趣として持つ。そしてここにある要素すべてを備えるもう一つの場面が89の出典、幻巻なのである。前三句の景物・表現を満たす故に、「月の花やかに」は頻出する表現でありながら当該場面の源氏詞として定着する。ここでは、すでに語句のレベルにとどまらない、まとまった場面文章の単位で源氏詞相互の付合が斟酌されている。

しかも、こうした源氏詞相互の付合は共通項でくくられる場合だけでなく、出典箇所の文脈を念頭に置いたきわめて技巧的なものさえもあった。たとえば、

18　はかなたちてもかきなせる文
19　よむ哥の難波津をたにたとられて
20　いたりふかきはまなふ道々
21　法に人耳とからぬをいかゝせむ

表面的な句意は、恋から雑、釈教へと移行しているが各句の源氏詞の出典を見ると、18は手跡・19は和歌・20は絵画・21は音楽についての話題である。句の表面の付合とは別に学芸という主題によって出典箇所を統一しているのが、ここの一連の源氏詞選択の主眼であろう。

さらに、

42　霜もおとさてさやくさゝ原
43　雪すこしひまある道のはや暮て

表面は冬の情景であるが、傍線部源氏詞の出典はそれぞれ42が藤袴巻、入内をひかえた玉葛に蛍兵部卿宮が恋文を贈る場面。43が、真木柱巻、髭黒大将が新婚の玉葛に逢うため六条院に出かけようとする場面である。入内直前と急転直下の意外な結婚後、という物語内の時間を意識した選択によって二人の求婚者（一人は好意を持たれつつ失敗し、他方は嫌われていたにもかかわらず成功した）の対照の妙をねらった配列である。時間の経過を意識したある種、物語的配列は他にも見出すことができる。

74　むかふかゝみにのこる若髪
75　秋の月雪はつかしき影なれや
76　浅茅色つきさらほひにけり

74の源氏詞は初音巻、光源氏の目に映る既に年老いた末摘花。75は、末摘花巻、光源氏が初めて目にした若盛りの末摘花である。長い時間

下・夕霧・蜻蛉各二句。一句のみの巻は、桐壺・紅葉賀・賢木・関屋・絵合・薄雲・初音・常夏・野分・藤袴・真木柱・梅枝・柏木・幻・宿木・東屋・浮舟・夢浮橋である。典拠となった巻の総数は三十八で、名所は宇治十三、須磨明石十二、北山七、小野五、嵯峨野二であった。

大永連歌と比較した文明連歌の特徴としては、先ず典拠となった巻に偏りが見られることが挙げられる。これは同一場面から繰り返し源氏詞がとられる事例があることとも関わっており、おそらく独吟という事情によるものかと推測される。また、物語詞と認定されるものは文明連歌では三十二例（特に前半五十句までに集中している）を数える。無論、源氏詞の指定がないので存疑の箇所もあるとはいえ、ここでも他の連衆に配慮しなくてすむ独吟の形式が源氏詞の選定事情に影響していると考えられるのである。さて、文明連歌はその成立時期からして当然非青表紙本の本文に依拠しており、その範囲も物語本文のみならず注釈書の内容にまで及んでいる。そして、各句に取られた源氏詞は必ずしも無造作・無作為に選ばれているわけではなく出典一覧の項で注記したように、相互の出典となる場面中に共通して存在する表現や情趣などが媒介となっている例がしばしば見受けられ（15と16、41と42、46と47、50と51、60と61、68と69、85と86・87など）、源氏物語の場面や本文そのものへの精通が大前提であったのは明らかである。なお、よく取られる巻は上に見る如く宇治十帖、須磨・明石巻、夕顔や若紫などの前半の巻で概ね同時代の源氏受容の傾向と一致している。

一方、大永連歌は源氏詞の出典が四十巻と広い範囲に渡っており、和歌からの一箇所を除き他は全て地の文から取られている。物語詞は十八例でしかも文明連歌に比較して出典箇所を特定するのが容易な場合が多い。作句にあたっての改変も少なく、総じて原典に忠実な取り方がなされているといえよう。この原典本文に対する忠実さ、密着度の高さは大永連歌の付合における源氏詞を検討していくとより鮮明になる。

連歌作者の、物語本文への習熟の深さは文明連歌の源氏詞の採取の機微にもうかがえたが、大永連歌においては一層顕著である。（以下、出典一覧を参照されたい。）

77　すさまじき外面の梢ものふりて

78　きくにさひしき鳥のから聲

77の出典は若紫巻、北山の尼君の京の邸宅。78は夕顔巻、某の廃院の怪異の夜の情景で周知の源氏寄合である。出典の当該箇所を参照すると、某の院における昼間の光景にやはり77の源氏詞と非常に類似した記述がある。前句の源氏詞「梢ものふりて」が類似表現「木立いとうとましくものふりたり」をたぐりよせ同じ場所にある「鳥のから聲」を選ばせている。単に荒廃した邸宅というだけの付合よりも一段複雑な操作が加わっているものと考えられる。

さらにもう一例、

93　舟路のわさとていそくかひもなし

94　こころほそきにあらき浪かせ

93の出典、夕顔巻上洛した伊予介の旅姿から、海路の旅の付合で94

この源氏詞は総角巻にも用例があるが、前句90の季からすると秋のこの箇所か。

92　我すむかたを　HIL
　かの我が住む方を見やりたまへば、霞のたえだえに梢ばかり見ゆ。　（浮舟　八—56）

93　舟路のわさ　JM
　船路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし　（夕顔　一—130）

94　こゝろほそきに（物語詞）　HIM
　涙絶ゆる時なく、娘どもも思ひこがるるを、船道ゆゆしと、かつはいさめけり。・・・かへる波もうらやましく、心細きに、船子どもの荒々しき声にて　（玉葛　三—283）

「心細し」はきわめて一般的な語彙であるが、この箇所はその直前に前句93の源氏詞と同じ語「船道」を持つ。

95　こゝらしほしむ　B
　世をうみにここらしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね　（明石　二—302）

96　としもかへりぬ（物語詞）
　年もかへりぬ　朱雀院には、姫宮、六条院にうつろひたまはむ御いそぎをしたまふ　（若菜上　五—46）

次の97より逆に「子の日」に縁のあるこの箇所を出典とした。

97　けふの子の日のまつ　FJ
　人よりことに数へ取りたまひける今日の子の日の松こそ、なほうれたけれ　（若菜上　五—49）

98　なさけおくるゝ（物語詞）
　未勘。

99　霞のたゝすまゐ　BHJL
　山の桜はまださかりにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば　（若紫　一—184）

100　みたれあそひて　H
　其駒など乱れ遊びて、ぬぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと見ゆ　（松風　三—142）

（一）

文明連歌では、出典が明らかになったと考えられるのは九十句。最も多いのが橋姫十四句。次いで須磨十句、若紫九句、夕顔・明石六句、若菜上・総角五句、桐壺四句、空蟬・賢木・松風各三句、紅葉賀・初音・野分・梅枝・若菜下・夕霧・椎本各二句、一句のみの巻は帚木・末摘花・花宴・葵・少女・行幸・常夏・柏木・御法・竹河・早蕨・手習である。源氏詞の典拠として取られた巻の総数は三〇。また、名所としては宇治二十、須磨明石十五、北山八、嵯峨野六、小野三であった。

大永連歌においては出典が考えられるのは九十二句。夕顔・若菜上八句、若紫七句、須磨・明石六句、帚木・空蟬・末摘花・手習各四句、少女・橋姫・総角・椎本各三句、花散里・松風・玉葛・胡蝶・若菜

79 おもひやりなき（物語詞）
未勘。

80 こゝろおくれて（物語詞）
あやしく心おくれてもすすみ出でつる涙かな　（梅枝　四―275）
「涙」と共にあるによりここが出典箇所か。

81 うつろひ人
なのめにうつろふかたあらむ人を恨みて、けしきばみそむかむはた、をこがましかりなむ　（帚木　一―58）
作句に際し本文を改変したか。

82 夢にやとのみ　H
しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひ静まるにしも、さむべきかたなく堪えがたきは　（桐壺　一―21）
国冬本「ゆめとのみまとはれしを」。

83 春夏すきぬ
人知れぬもの思ひのまぎれも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ　（末摘花　一―255）

84 熊おほかみに　B
かひなき身をば、熊狼にも施しはべりなむ　（若菜上　五―104）

85 ひゝきのゝしる
川の方を見やりつつ、響きののしる水の音を聞くにも、うとましく悲しと思ひつつ　（蜻蛉　八―109）

86 はれまめつらし　B
忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間にわたりたまふ　（花散里　二―194）

87 若かえてかしわき　IM
雨のうち降りたる名残の、いとものしめやかなる夕つかた、御前の若楓、柏木などの、青やかに茂りあひたるが、　（胡蝶　四―48）

88 かつらのをひかせ　BCEHILM
大きなる桂の追ひ風に、祭のころおぼし出でられて、そこはかとなくけはひをかしきを　（花散里　二―194）
86とこの句は出典箇所が同一場面。

89 月の花やかに（物語詞）　GJ
五月雨は、いとどながめくらしたまふよりほかのことなく、さうざうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君御前にさぶらひたまふ。花橘の、月影にいときはやかに見ゆる薫りも、追風なつかしければ　（幻　六―144）
86からこの89句まで、源氏詞の出典箇所は非常に類似した情趣・表現を共有している。

90 さらにもいはす　HI
容貌をばさらにも言はじ　（帚木　一―56）
57と出典箇所は同一。

91 枕をそはたて、　HIKL
ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくるここちして　（須磨　二―237）

時ありて一度ひらくなるは、かたかなるものを（若紫　一―203）

68 旅のおまし　HIM

月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所は、奥まで隈なし（須磨　二―246）

69 あまの家たに　BHM

今はいと里離れ心すごくて、海士の家だにまれに、など聞きたまへど（須磨　二―201）

70 海のおもて　BCFHI

海の面うらうらと凪ぎわたりて、行方も知らぬに、来し方行く末おぼし続けられて（須磨　二―255）

71 こゝろをよする（物語詞）　HI

国の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せつかうまつる（須磨　二―226）

72 かへりみへくも

このたびはうれしきかたの御出で立ちの、またやはかへりみるべきとおぼすに、あはれなり（明石　二―296）

73 三十四十と　ABCJ

十、二十、三十、四十などかぞふるさま、伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ（空蟬　一―109）

74 若髪　G

いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ころに衰へゆき、まして滝の淀みはづかしげなる御かたはらめなどを、いとほしとおぼせば（初音　四―21）

75 雪はつかしき　B

色は雪はづかしく白うて真青に、額つきこよなうはれたるになほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。・・・頭つき髪のかかりはしも、うつくしげに、めでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、袿の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。（末摘花　一―270）

右点線部が前句74の出典箇所中の「御若髪」に相当する箇所。

76 さらほひにけり　B

痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上に見ゆ。（末摘花　一―270）

前句75とこの句の源氏詞出典箇所は同一場面。

77 梢ものふりて　HIM

荒れたる家の、木立いともの古りて木暗う見えたるあり（若紫　一―217）

78 鳥のから聲　BCEGHIM

いといたく荒れて、人目もなく遥々と見渡されて、木立いとうとましくものふりたり。（夕顔　一―146）

けしきある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ（夕顔　一―153）

この句の出典箇所は某の廃院の情景。右点線部の表現により前句の源氏詞と連結するか。

花、乱れがはしく散るめりや　桜は避きてこそ　（若菜上　五―126）

前句51の「風」の縁によりこの箇所か。文明連歌21の出典箇所参照。

53 （しけりたる）青葉の山　FGHKL
小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向ひて、まぎるることなく　（夢浮橋　八―268）

54 あふきならても　BCFHKL
扇ならで、これしても、月は招きつべかりけり（橋姫　六―275）

55 窓のほたる　B
世界の栄華にのみたはぶれたまふべき御身をもちて、窓の蛍をむつび、枝の雪を馴らしたまふ心ざしのすぐれたるよし　（少女　三―226）

56 ひるよる（わかす）
昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて　（明石　二―279）

57 かたちをはさらにもいはし　HM
今はただ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ　（帚木　一―56）

58 なひかしつへく
さもなびかしつべきけしきにこそはあらめ　（空蟬　一―110）

59 さてのみはいかてあらん
しひてもおし立ちたまはぬさまなり　されど、さのみもいかでかはあらむ　人ざま、いとあてに、そびえて　（明石　二―291）

河内本「さてのみはいかてかあらむ」陽明本「さのみもいかゝはあらむ」

60 露の玉の緒　EIM
草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心まどひもしぬべくおぼしたり　（野分　四―124）

61 ゐ中のくま
さる田舎の隈にて、ほのかに京人と名のりける、古王女の教へきこえければ、ひがごとにもやとつつましくて　（常夏　四―93）

62 たちとかはらす
几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立処かはらず　（末摘花　一―267）

63 ひた引きならす　ABFHJKL
引板ひき鳴らす音もをかし　見し東路のことなども思ひ出られて　（手習　八―193）

64 夕かけになり　FH
東の高欄におしかかりて、夕影になるままに、花のひもとく御前の草むらを見わたしたまふ　（蜻蛉　八―164）

65 さくらひとつ　M
春の鳥の桜ひとつにとまらぬ心よ　（若菜上　五―132）

66 春の手向　M
色々こぼれ出たる御簾のつま、透影など、春の手向の幣袋にやとおぼゆ　（若菜上　五―126）

67 時ありて一たひ　EH

38 身のおもはすに
このことのみにもあらず、身の思はずになりそめしより、いみじうものをのみ、思はせたてまつること　（夕霧　六—35）

39 山ふしはかゝる　HL
あはれ山伏は、かかる日にぞ音は泣かるなるかし　（手習　八—237）

40 竹あめる垣　BCFHIKL
竹編める垣しわたして、石の橋、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし　（須磨　二—251）

41 木からしのたへかたき　HK
木枯の堪へがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を　（宿木　七—234）

42 霜もおとさて　BH
朝日さす光を見ても玉笹の葉分けの霜を消たずもあらなむ
おぼしだにしらば、なぐさむかたもありぬべきなむ。」とて、いとかしけたる下折れの霜もおとさず持て参れる御使さへぞ、うちあひたるや　（藤袴　四—199）

43 雪すこしひまある　IM
「雪すこし隙あり、夜はふけぬらむかし。」など、さすがにまほにもあらでそそのかしきこえて、声づくりあへり。　（真木柱　四—217）

44 ねくらのうくひす
ものの調べどもなつかしく変りて、青柳遊びたまふほど、げにねぐらの鶯おどろきぬべく、いみじくおもしろし　（若菜上　五—52）

45 えむたち
えんだちけしきばまむ人は、消えも入りぬべき住ひのさまなめりかし　（夕顔　一—140）

46 百歩のほか　A
くさぐさの御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、こころことにととのへさせたまへり　（絵合　三—93）

47 さうしみ（物語詞）FG
未勘。

48 しらすかほなり（物語詞）F
未勘。

49 あやにくにまきれかたしや
かく執念き人はありがたきものをとおぼすにしも、あやにくにまぎれがたう思ひいでられたまふ　（空蟬　一—113）

50 笛は月には
吹き合はせたる笛の音に、月もかよひて澄めるここちすれば　（手習　八—210）
作句の際に本文改変か。

51 風吹きとをす　IM
この障子口にまろは寝たらむ　風吹きとほせ　（空蟬　一—111）

52 みたりかはしき（物語詞）

も重かなり　（柏木　五―279）

23 世のましらひかな　H
心よりほかにをかしきまじらひかなと、かの夕顔の宿りを思ひいづるもはづかし　（夕顔　一―171）

24 たちくだれる（物語詞）
未勘。

25 いとねたくまけてやまし
おいらかならましかば、心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬをりなし　（夕顔　一―129）

26 おもひさまさん（物語詞）
あさましう、今までながらへはべるやうなれど、思ひさまさむかたなき夢にたどられはべりてなむ　（椎木　六―331）

次の27の「夢うつつ」にこの出典箇所の「夢」が呼応しているか。

27 花の木とも（物語詞）
未勘。

28 草青やかに　IM
草青やかに繁り、軒のしのぶぞ所え顔に青みわたれる　（橋姫　六―258）

29 さへつる山の鳥　B
いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへつる鳥の音さへかはらぬ　（少女　三―268）

30 谷の底　BC
僧都、世に見えぬさまの御くだもの、何くれと谷の底まで堀り出でいとなみきこえたまふ　（若紫　一―202）

31 見わたさるゝ（物語詞）
未勘。

32 おとしかけ　H
御直衣の花のおどろおどろしう移りたるを、おとしかけの高き所に見つけて、引き入れたまふ　（東屋　七―340）

33 人よりさきに（物語詞）
未勘。

34 霧にとちられ
まだ夕暮の、霧にとぢられて内は暗くなりにたるほどなり　（夕霧　六―20）

35 花のちきりや　BHIM
くちをしの花の契りや、一ふさ折りて参れ　（夕顔　一―122）

36 七夕はかり　HIJ
げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ　（総角　七―76）

37 うらもなく（物語詞）
うらもなく待ち聞こえ顔なる片つ方人を、あはれとおぼさぬにしもあらねど　（夕顔　一―130）

この箇所、光源氏のその場限りの嘘を真に受ける軒端荻について記述。

三條西家本・肖柏本・河内本は「しはふるひひと」。

何とも聞きわくまじきこのもかのものしはふる人どもも、すずろはしくて、浜風をひきありく　（明石　二―275）

三條西家本・肖柏本・池田本は「しはふるひ人」。河内本は「しはふるい人」。

12　みそれふるよ　BH

臨時の祭の調楽に、夜ふけて、いみじく霙降る夜　（帚木　一―65）

13　真木の戸くち　ABHIM

月入れたる真木の戸口けしきばかりおしあけたり　（明石　二―290）

14　まかきのむし　FHIJ

秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、おのづからあはれ多かるを、まして籬の虫も心細げにのみ聞きわたさる（総角　七―24）

15　秋の比ほひ　IJ

秋のころほひなれば、もののあはれ取り重ねたるここちして、その日とある暁に、秋風涼しくて、虫の音もとりあへぬに　（松風　三―124）

この源氏詞は末摘花巻にも用例があるが「虫の音」と取り合わされるのはこの箇所のみ。

16　風の竹になる　HIM

雨はやみて、風の竹に鳴るほど、はなやかにさし出でたる月影、をかしき夜のさまもしめやかなるに　（胡蝶　四―52）

17　世間につたへてもらす

またこのことを知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ　（薄雲　三―172）

河内本は「世の中にもらし伝ふる」の異文を持つ。作句に際し本文を改変しているか。

18　はかなたちても（物語詞）　H

手は、はかなだちて、よろぼはしけれど、あてはかにてくちをしからねば御心落ちゐにけり　（玉葛　三―397）

出典は玉鬘の筆跡についての場面。

19　難波津をたに　BFHJ

まだ、難波津をだにはかばかしう続けはべらざらめれば、かひなくなむ　（若紫　一―210）

20　いたりふかき　BIM

人の国などにはべる海山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ・・・

播磨の明石の浦こそ、なほことにはべれ　何の至り深き隈はなければ　（若紫　一―186）

21　耳とからぬ

とどめがたきものの音どもの、いづれともなきを、聞き分くほどの耳とからぬたどたどしさに、いたくふけにけり　（若菜下　五―185）

22　つみおもかなり

なほ、え生きたるまじきここちなむしはべるを、かかる人は罪

100 時うつりても（物語詞）　G

時移りて、世の中にはしたなめられたまひけるまぎれに、なかなか名残なく　（橋姫　六―255）

発句の源氏詞を桐壺巻冒頭の一文からから採ったのに対応させて、挙句の源氏詞は宇治十帖の巻頭から選んだか。

大永元年源氏詞連歌

1 もみちこきませ　HILM

風うち吹きたる夕暮れに、御箱の蓋に、いろいろの花紅葉をこきませて、こなたよりたてまつらせたまへり　（少女　三―277）

九月晦日なれば、紅葉の色々こきまぜ、霜枯れの草、むらむらをかしう見えわたるに　（関屋　三―86）

2 そゝろさむきに（物語詞）　H

今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととともおぼえず　（紅葉賀　二―15）

発句の「紅葉」により「そぞろ寒し」の出典はこの箇所。

3 衣うつきぬた　EHIJKM

白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなたに聞きわたされ、空飛ぶ雁の声、取り集めて、忍びがたきこと多かり　（夕顔　一―141）

4 瀧のもとなり　BFHIK

落ち来る水のさまなど、ゆゑある瀧のもとなり　（若紫　一―205）

5 嶺の八重雲　FHIJKM

峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこの姫君たちの御心のうちども心苦しう　（橋姫　六―283）

6 道の空　HJ

山籠りの本意深く、今年は出でじと思ひけれど、限りのさまなる親の道の空にて亡くやならむとおどろきて　（手習　八―173）

7 馬とものいはゆる　HK

御供の人々起きて声づくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿りのあるやうなど人の語る、おぼしやられて　（総角　七―24）

8 こゝろよけに（物語詞）

絵などのこと、雛の捨てがたきさま、若やかに聞こえたまへば、げにいと若く心よげなる人かなと、幼き御ここちにはうちとけたまへり　（若菜上　五―82）

9 おきふしなひく　FHIK

川そひ柳の起きふしなびく水影など、おろかならずをかしきを　（椎本　六―308）

10 川よりをちに　ABCFHI

右の大殿知りたまふ所は、川より遠に、いと広くおもしろくてあるに、御まうけせさせたまへり　（椎本　六―305）

11 柴ふるひ人　BH

このもかのもに、あやしきしはふるひども集りてゐて、涙落しつつ見たてまつる　（賢木　二―163）

55・85とこの句の出典箇所は同一場面。　（須磨　二―237）

88 はちすのうえのねかひ　JM
昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへと　（明石　二―279）

89 池の心　ACFGJ
もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる　（桐壺　一―41）

90 岩によりゐて　CHIKLM
源氏の君、いといたううちなやみて岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ　（若紫　一―205）

91 花の契りや　HIMJ
くちをしの花の契りや　一ふさ折りて参れ　（夕顔　一―122）

92 つゝし山ふき　J
五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて　（少女　三―274）

93 たと〳〵しくはかすまぬに（物語詞）
春の空のたどたどしき霞の間より、おぼろなる月影に、静かに吹き合はせたるやうには、いかでか　（若菜下　五―178）
「春のくれ」とあるによって出典箇所はここか。

94 きりふたかりぬ（物語詞）　KL
ひぐらしの声におどろきて、山の蔭いかに霧りふたがりぬらむ、あさましや　（夕霧　六―45）

95 まほりなれにし月のかほ　BCGHILM
殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ　（須磨　二―240）

96 きぬた　EHIKM
白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ　（夕顔　一―141）

25の出典と同一場面。

97 なりはひ　しつ　H
隣の家々、あやしき賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや、今年こそなりはひにも頼むところすくなく　（夕顔　一―140）

24の出典と同一場面。

98 こまのあたりのうり　GJ
山城の　狛のわたりの　瓜つくり　なよや　らいしなや　さいしなやいかにせむ
紅葉賀「うりつくりになりやしなまし」（二―37）の注釈。河海抄がひく催馬楽、呂、「山城」から。

99 をのかしし（物語詞）　GH
いとあはれなるおのがじしのいとなみに、起き出ててそそめき騒ぐもほどなきを、女はいとはづかしく思ひたり　（夕顔　一―140）
この源氏詞の出典箇所は24・97と同一場面であり、25・96と連続している。

おほかたにとやかくやと、人の御上は、かかる山隠れなれど、おのづから聞こゆるものなれば　（総角　七―79）

74 よしある（物語詞）
宇治といふところに、よしある山里持たまへりけるにわたりたまふ　（橋姫　六―263）

75 すみつく（物語詞）
才など深くもえ習ひたまはず、まいて世の中に住みつく御心おきては、いかでかは知りたまはむ　（橋姫　六―262）

前句74とこの句の出典箇所は連続。

76 おひさきみゆる　I
いと若けれど、生ひさき見えてふくよかに書いたまへり　（若紫　一―239）

77 つくづくし　ABCEHIJ
蕨、つくづくし、をかしき籠に入れて「これは童べの供養じてはべる初穂なり」とてたてまつれり　（早蕨　七―126）

78 かすみのまより　AEH
春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見るこちす　（野分　四―125）

79 かくろへて（物語詞）
夜目にこそしるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ　（末摘花　一―272）

この場面、末摘花との雪の後朝。「しら雪」と源氏出典箇所は「雪」の縁か。

80 冬こもる
かならず冬籠る山風ふせぎつべき綿衣などつかはしを、おぼし出でてやりたまふ　（椎本　六―338）

81 難波つや　BFHJ
まだ難波津をだにはかばかしう続けはべらざめれば、かひなくなむ　（若紫　一―210）

82 浪のひゝき　ILM
いと荒ましき水の音波の響きに、もの忘れうちし、夜など、心解けて夢をだに見るべきほどもなげに　（橋姫　六―269）

83 都はなれて
都離れてのち、昔親しかりし人々、あひ見ること難うのみなりにたるに、かくわざと立ち寄りものしたること　（須磨　二―242）

84 うらやましきは　BL
故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね　（須磨　二―252）

85 こひわひぬ　B
恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ　（須磨　二―237）

86 なきねに　I
殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ　（若紫　一―213）

87 枕をそはたて、　BHIKL
ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくるここちして、涙落つともおぼえぬに

59 かひまみ（物語詞）ＢＣＤＥ
源氏小鏡の若紫巻北山の源氏寄合

60 かすみにこもる　北やま　Ｊ
はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、絵にいとよくも似たるかな　（若紫　一―185）

61 花の木ども（物語詞）　Ｋ
ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々紐ときわたる花の木ども、わづかなる萌黄の蔭に　（若菜上　一―125）
前句60の「かすみにこもる」からこの句の出典箇所の右点線部に繋がる。

62 にる物もなき　Ｈ
「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたざまには来るものか　（花宴　二―52）

63 ひやゝかに風（物語詞）　Ｊ
都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槙の山辺もわづかに色づきて　（椎本　六―314）
「秋」とともに用いられているのはこの箇所のみ。

64 影かくす月　ＢＨ
雲の上のすみかを捨てて夜半の月いづれの谷にかげ隠しけむ　（松風三―141）

65 すこけに（物語詞）
未勘。

66 さとはなれたる　ＡＢＨＭ
かの須磨は、昔こそ人の住処などもありけれ、今は、いと里離れ心すごくて、海士の家だにまれに　（須磨　二―201）

67 つり舟
ただ行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の友とながめはべるに、うれしき釣舟をなむ　（明石　二―268）

68 あまのさえつり　ＡＢＨ
鵜飼ども召したるに、海士のさへつりおぼし出でらる　（松風　三―139）

69 はねうちかはし　ＩＭ
池の水鳥どもの、羽うちかはしつつ、おのがじしさへづる声などを、常ははかなきことに見たまひしかども　（橋姫　六―260）
前句68の源氏詞から右点線部へ繋がる。

70 うれはしき（物語詞）Ｆ
中納言の君も、なかなかたのめきこえけるを、憂はしきわざかな、とおぼゆ　（総角　七―79）

71 ことさまに（物語詞）
おぼさるるやうこそはあらめ、軽々しく異ざまになびきたまふことはた、世にあらじと、心のどかなる人は（総角　七―72）
前句70とこの句の出典箇所は後の73とあわせて連続する一場面。

72 春と秋とにめつるあらそひ　ＡＨＪ
春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名だたる春の御前に心寄せし人々　（野分　四―123）

73 山かくれ　Ｈ

ややかに吹きたるに、滝の淀みもまさりて音高う聞こゆ
（若紫　一―197）

47 なかめくらさん（物語詞）
その夕より、乱りごこちかきくらし、あやなく今日はながめ暮らしはべる
（若菜上　五―134）
前句46の源氏詞から右点線部へと連想が働いてこの箇所か。

48 ぬれまさり行
未勘。

49 陰　えならぬ花　J
大将も督の君も、皆おりたまひて、えならぬ花の陰にさまよひたまふ夕ばえ、いときよげなり
（若菜上　五―125）

50 ところえ顔（物語詞）
草青やかに繁り、軒のしのぶぞ所え顔に青みわたれる
（橋姫　六―258）
次の51の出典の「草」の関連によってこの箇所。

51 けしきたつあさ霞
雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびやかにぞ見ゆるかし
（初音　四―11）

52 山かさなれる　BCHI
いとど山重なれる御住処に、尋ね参る人なし
（橋姫　六―264）

53 柴ふるひ人　BH
このもかのもに、あやしきしはふるひどもも集まり
（賢木　二―163）
河内本・肖柏本・三條西家本は「しはふるひひと」
このもかのものしはふる人どももすずろはしくて
（明石　二―275）
河内本は「しはふるい人」肖柏本・池田本・三條西家本は「しはふるひ人」

54 あらましき風（物語詞）　GHLM
道も見えぬ繁き野中を分けたまふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるも
（橋姫　六―272）
20の出典と同一箇所。

55 たゝこゝもと　ABCHKLM
枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくるここちして、涙落つともおぼえぬに
（須磨　二―237）

56 千いろのそこ　BH
はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆくすゑはわれのみぞ見む
（葵　二―75）

57 引きすくる舟の綱手
まして五節の君は、綱手引き過ぐるもくちをしきに、琴の声、風につきて遥かに聞こゆるに
（須磨　二―241）

58 まほにもあらす（物語詞）
さばかりいはけなげなかりしけはひをと、まほならねども、見しほど思ひやるもをかし
（若紫　一―211）

かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの日数隔てむ中の衣を　（明石　二―302）

前々句以来の「衣」の連想によってこの箇所。

36　よそほひ（物語詞）

未勘。源氏詞の認定は「衣」の縁から。

37　にほひことなる　H

斎院の御黒方、さいへども、心にくくしづやかなる匂ひことなり　（梅枝　四―258）

38　さまかはりたる（物語詞）

さまかはりしめやかなる香して、あはれになつかし　（梅枝　四―259）

37・38は朝顔前斎院から梅の枝につけて贈られた文と薫物についての同一場面が出典箇所。

39　立ちましる　H

衛門の督のかりそめに立ちまじりたまへる足もとに並ぶ人なかりけり　（若菜上　五―125）

40　ひゝきあひぬる（物語詞）

三昧堂近くて、鐘の声、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばえあるさまなり　（明石　二―289）

41　うちしきる

まうのぼりたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ（桐壺　一―14）

30と出典は連続した箇所。この句の「夕の鐘」は前句40の源氏詞の出典箇所にある「鐘の声」と関連し、次の42の出典箇所に繋がる。

42　むかひのてら　HIJL

簾巻き上げて見たまへば、向かひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて　（総角　七―113）

43　経をかた手とならひよむ

経を片手に持たまひて、かつ読みつつ唱歌をしたまふ　（橋姫　六―262）

えさらず世にあり経るほど、公私に暇なく明け暮らし、わざとと籠りて　習ひ読み　（橋姫　六―268）

44　すこくきこゆれ（物語詞）

すこしねぶたげなる読経の絶え絶えすごく聞こゆるなど、すずろなる人も所からものあはれなり　（若紫　一―197）

習ひ読む経から「読経」の場面の源氏詞。

45　けうそくによりぬる（ゐ）　H

風すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見たまふとて、脇息によりゐたまへるを、院わたりて見たてまつりたまひて　（御法　六―111）

この部分、青本紙本・河内本・別本（保坂本を除く）皆特に異同なし。保坂本は「よりか、りゐ給へる」文明連歌陽明本・平松本の異文「よりゐる」は源氏原典の本文と同じ。

46　いともこ、ちのなやましき

君はここちもいとなやましきに、雨すこしうちそそき、山風ひ

思へど　（紅葉賀　二―12）

他所にも用例はあるが前句21の「紅葉ばの」との関連でこの箇所。

23　物とをかして

かくあはれなる御住ひなれば、かやうの人もおのづからもの遠からで、ほの見たてまつる御さま、容貌を、いみじうめでたしと　（須磨　二―233）

24　となり　やと　H

隣の家々、あやしき賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや　（夕顔　一―140）

25　されたる竹　HIKM

ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露は、なほかかる所も同じごときらめきたり　（夕顔　一―141）

24・25の出典は連続した同一箇所。

26　はひひろこれる　H

一むらすすきたのもしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとあはれに露けくて　（柏木　五―312）

27　なかき代のいのり

年ごとの春秋の神楽に、かならず長き世の祈りを加へたる願ども、げにかかる御勢ならでは　（若菜下　五―153）

28　神のたすけ　BHKL

神の助けおろかならざりけり

海にます神の助けにかからずは潮の八百会にさすらへなまし　（明石　二―264）

29　ゆへ有りて（物語詞）

未勘。

30　えさらぬみち

またある時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた、心をあはせてはしたなめわづらはせたまふことも多かり　（桐壺　一―14）

河内本・別本の陽明本、御物本では「えさらぬみちのとともをさしかためなと」とあって同じ形を持つ。この百韻が典拠とした源氏物語の本文は非青表紙本であったことをうかがわせる。

31　ところせき（物語詞）

未勘。

32　そゝろさむくも（物語詞）

ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りてそぞろ寒きに、竹河歌ひて、かよれる姿、なつかしき声々の　（初音　四―26）

前句31の「雪」とこの句の「あけがた」から出典はこの箇所か。

33　ぬきすへしたる

かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣を取りて出でたまひぬ　（空蟬　一―114）

34　かへす〳〵も（物語詞）B

唐衣また唐衣唐衣かへすがへすも唐衣なる　（行幸　四―172）

前句33は陽明文庫本・平松本によって本文が復元できたが、前句の「唐衣」からこの句の出典箇所へと繋がる。

35　あふこと（物語詞）B

桜さくさくらの山のさくら花咲く桜あれはちるさくらあり
「咲く桜あれば散りかひくもり」（竹河　六―214）の源氏釈・河海抄が注釈としてあげる歌からとったもの。

11　つとそひゐたる（物語詞）
未勘。

12　ありふるまゝに
あり経るにつけても、いとはしたなく、堪へがたきこと多かる世なれど、見捨てがたくあはれなる人の御ありさま心ざまに
（橋姫　六―256）

13　かゝつらひ（物語詞）G
あながちにかかづらひたどり寄らむも人わろかるべく
（空蟬　一―105）
5の出典と同一場面から取られたと考えられる。

14　ひたすら（物語詞）
未勘。

15　ゆるゝかなるに
「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ
（須磨　二―239）

16　いむ事　たもつ
またその人ならぬ仏の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあれど、けはひいやしく言葉たみて
（橋姫　六―270）
前句の出典箇所中「釈迦牟尼仏弟子」から「仏の御弟子」へ連想が繋がって導かれたものか。

17　さまかはりたる神つかさ　BEH
神司の者ども、ここかしこにうちしはぶきておのがどち、ものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさま変りて見ゆ
（賢木　二―129）

18　くろ木の鳥井　ABCEHKL
黒木の鳥居どもはさすがに神々しく見えわたされて、わづらはしきけしきなるに、神司の者ども、
（賢木　二―129）
前句とこの句、源氏詞の出典箇所は同一。

19　かたふきかかる　BCHKL
添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、「入り日を返す撥こそありけれ
（橋姫　六―276）
2の出典と連続した同一場面である。

20　ほろ〳〵とおつる木々の下露　BHKL
いと荒ましき風のきほひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに
（橋姫　六―272）

21　みたりかはしく（物語詞）
花、乱りがはしく散るめりや、桜は避きてこそ
（若菜上　五―126）
吹く風よ心しあらばこの春の桜はよきて散らさざらなむ
（『源氏釈』引歌）
出典箇所の引歌の注釈から。

22　さう〳〵しかる（物語詞）　G
こころみの日にかく尽くしつれば、紅葉の蔭やさうざうしくと

文明十三年独吟源氏詞連歌

1　時めきぬ（物語詞）ＨＩＭＪ

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり　（桐壺　一―11）

「夕顔の花の紐」からすぐに連想される源氏物語本文「白き花ぞ、おのれひとり笑の眉ひらけたる」（夕顔　一―122）の「おのれひとり」から帝の寵愛を一身に集める「時めきぬ」を導く。

2　手まさくりなる　ＢＣＨＫＬ

柱に少し居隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐたるに　（橋姫　六―275）

前句とこの句は「夕顔の花」と「扇」という周知の源氏寄合によって付いているが、賦物としてよみこまれた源氏詞は橋姫巻に一例だけ見える「手まさぐり」である。

3　けふ　あつくして

日のどかに曇りなき空の、西日になるほど、蝉の声などもいと苦しげに聞こゆれば「水の上無徳なる今日の暑かはしさかな　（常夏　四―85）

ごく一般的な語彙であるが右点線部を水無月の炎暑をいう「照る日」の語で表し、本文を若干改変したか。

4　わけいりて　山はかけ

かく山深く分け入る心ざしは隔て残るべくやは（夕霧　七―60）

空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の陰は小暗きここちするに　（夕霧　七―17）

5　たとりよらむ

あながちにかかづらひたどり寄らむも、人わろかるべく　（空蟬　一―105）

6　しめやかに　ふりいつる

村雨の降り出づるにとどめられて、物語しめやかにしたまふ　（手習　八―198）

7　おほめく（物語詞）

かの淡路島をおぼし出でて、躬恒が「所からか」とおぼめきけむことなどのたまひ出でたるに　（松風　三―141）

「おほめく」の用例は他にもあるが躬恒歌「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵は所からかも」中の月によりこの箇所とした。

8　えんなるそら　あけぼの　ＨＩ

月は有明にて、光をさまれるものから、かほけざやかに見えて、なかなかをかしき曙なり　何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすごくも見ゆるなりけり　（帚木　一―93）

9　かへるさ（物語詞）

道のほども、帰るさはいとはるけくおぼされて、心安くもえ行き通はざらむことの、かねていと苦しきを　（総角　七―54）

他所にもあるが、出典場面が前句8と同様、逢瀬の難しい後朝の縁からこの箇所とした。

10　さくらさく山

100　みたれあそひてあかぬ野の春　暮　中務卿宮

御製十六句　新中納言　三
親王御方　十一　甘露寺中納言　八
中務卿宮　九　秀房朝臣　六
民部卿　十一　重親朝臣　五
帥大納言　十二　資能朝臣　三
冷泉前中納言　十二　範久　四

源氏詞出典一覧

出典に関しては、基本的に源氏物語の本文をそのまま表現に用いたものを源氏詞として認定する方針をとる。源氏詞はいわば特殊賦物としてとられているので、表面の句意や付合とはしばしば無関係に選択されており、また源氏詞相互の選択配列の基準も句ごとの付合とは別の次元での考察が必要である。特に、大永元年の百韻が本々の源氏詞の箇所に傍線が付されているのに対し、文明十四年の百韻は傍線注記がなく、しかも独吟という事情もあってしばしば源氏詞の認定にとまどうところがある。したがって、出典箇所には判断の根拠として私見による解説を加えることにした。また「物語詞」は源氏物語中複数の箇所で用例がみられその語句単独では出典を特定しにくいものに用いた。

出典の引用本文は、『新潮古典集成源氏物語』に依る。漢数字は巻数、アラビア数字は頁数を示す。適宜『源氏物語大成』校異編により異同を示した。なお、参考として源氏詞の当該場面が室町期に作られた、以下の源氏物語梗概書、連歌寄合、連歌辞書、和歌や本文の抄出などと一致する場合にはその略号を示した。

〈略号〉

光源氏一部連歌寄合（国文学研究資料館蔵）・・A
源氏大鏡（一類本・古典文庫）・・B
源氏小鏡（古本系・京都大学蔵持明院基春筆）・・C
源氏の注小鏡（改訂本系・宮内庁書陵部蔵）・・D
連珠合璧集（三弥井書店『中世の文学　連歌論集一』）・・E
源氏綱目（桜楓社『源氏物語古注集成一〇』）・・F
藻塩草（古活字板・源氏の注記を有す語）・・G
紫塵愚抄（武蔵野書院『源氏物語古注釈叢刊五』）・・H
源氏物語宗長抜書（紫塵残抄・太田市立中島記念図書館蔵）・・I
源氏一部抜書（早稲田大学出版部『源氏物語資料影印集成1』）・J
光源氏物語内連歌付合（宮内庁書陵部蔵）・・K
源氏物語内名所寄合（大喜多勘学氏蔵）・・L
源氏物語之詞並歌抄出（内閣文庫蔵）・・M

なお、ここでの傍線は、点線・実線とも私に付した。

86 晴間・
はれまめつらし五月雨のころ　範久

87 楓・・は　陰・
若かえてかしわきしけるかけふかみ　帥大納言

88 風・
ちかきかつらのをひかせもよし

89 ・
この夕出たる月の花やかに　冷泉前中納言

90
さらにもいはす秋のかなしさ　民部卿

91 知・
しらぬ墅の露に枕をそはたて、　重親朝臣

92 わか住方・　杳・
我すむかたをおもふはるけさ　冷泉前中納言

名残折裏

93 みち
舟路のわさとていそくかひもなし　民部卿

94 心・・　波
こゝろほそきにあらき浪かせ　甘露寺中納言

95 古・
浦さとやこゝらしほしむ身はふりて　冷泉前中納言

96 年・
としもかへりぬなにかなくさめ　新中納言

97
とはれぬをけふの子の日のまつもうし

98 花・　情・・
さかてそはなのなさけをくる、　秀房朝臣

99
そことなき山や霞のたゝすまゐ　親王御方

72 かへりみへくもおもはぬかうき　思・　親王御方

73 三十四十とかそへし年は昔にて

74 むかふかゝみにのこる若髪（かみ）　中務卿宮

75 秋の月雪はつかしき影なれや　帥大納言

76 浅茅色つきさらほひにけり　付・ち　民部卿

77 すさましき外面の梢ものふりて　冷・・物・　親王御方

78 きくにさひしき鳥のから聲（こゑ）　中務卿宮

名残折表

79 とへかしなおもひやりなき夕ま暮（くれ）　思・・　秀房朝臣

80 こゝろをくれて涙おとしつ　心・・なみた　甘露寺中納言

81 したふにもうつろひ人はかひあらし　中務卿宮

82 夢にやとのみうきはわすれん　忘・　冷泉前中納言

83 おもほえす春夏すきぬ山のおく　過・　帥大納言

84 熊おほかみになるゝ柴の戸

85 ゆく水のひゝきのゝしる音はして　行・　親王御方

57 形・・ かたちをはさらにもいはし心にて　甘露寺中納言

58 なひかしつへく猶やしたはん　民部卿

59 扨・ 、 頼・ さてのみはいかてあらんとたのむ身に　・冷泉前中納言

60 草はのうへの露の玉の緒

61 田舎 みる月もゐ中のくまにかひなくて　範久朝臣

62 立跡・ 鳴・ たちとかはらす鹿やなくらん　民部卿

63 住みわひぬひた引きならす小田の庵　帥大納言

64 る 閑・・ 夕かけになり山のしつけさ　親王御方

三折裏

65 桜・・ あやにくにさくらひとつに風吹て

66 春の手向の花さきにけり　帥大納言

67 有・ 時ありて一たひはれよ朝かすみ　民部卿

68 永・ 旅のおましにをくる日なかさ　中務卿宮

69 嶋・ 沖つしまあまの家たにまれにして　・冷泉前中納言

70 うみ 里・也 海のおもては千さと成けり

71 心・・ 恋しさのこゝろをよする波もかな　・・範久朝臣

42 霜もおとさてさやくさゝ原　帥大納言

43 雪すこしひまある道のはや暮て　隙・有・早・くれ　親王御方

44 いつくねくらのうくひすの聲　こゑ　甘露寺中納言

45 山かけのかすみえむたちあかなくに　陰・霞・・　中務卿宮

46 百歩のほかも梅かゝそする　外に　むめ香　親王御方

47 さうしみはかくるゝこすに袖みえて　見へ　民部卿

48 いひいるゝをもしらすかほなり　冷泉前中納言

49 あやにくにまきれかたしやわかおもひ　思・　甘露寺中納言

50 笛は月には猶そすみたる　帥大納言

三折表

51 此のやとり風ふきとをす秋の聲　舎・　こゑ

52 露そ千種にみたりかはしき　重親

53 しけりたる青はの山の陰ふかみ　茂・・　冷泉前中納言

54 あふきならても袖そ涼しき　す、　帥大納言

55 たかまなひ窓のほたるをむつひけん　学・・

56 ひるよるわかすおもふとをしれ　昼・　思・　秀房朝臣

27 夢うつゝ花の木ともの散て後　重親

28 草あをやかにかすむ夕かせ　帥大納言

29 幽・・かすかにもさへつる山の鳥のこゑ　聲　民部卿

30 そこ　せ　谷の底にも水むすふなり

31 桟・・・・みかけはしは見わたさるゝもあやうきに　親王御方

32 おとしかけなり道はわりなし　民部卿

33 旅の空人よりさきに起出て　帥大納言

34 霧にとちられ袖も露けき　冷泉前中納言

35 朝兒・・あさかほの花のちきりやかけつらん

36 七夕はかりまれにとふほと　二折裏

37 偽・・・頼・来うらもなくいふいつはりをたのみきて　秀房朝臣

38 思・・身のおもはすになからへそこし　中務卿宮

39 伏・住ゐ・山ふしはかゝるすまひも物うきに　冷泉前中納言

40 化・みあたにも見るや竹あめる垣　資能朝臣

41 枯・・木からしのたへかたき日の冬こもり

12 みそれふるよの明かたのゆき（降・雪・）　範久（高倉範久）

13 月みむと真木の戸くちは立さらす（ん・まき・口・）　資能朝臣（綾小路資能）

14 まかきのむしも聲しきるなり（也・）　帥大納言

15 さひしさの物とは秋の比ほひそ（に）　親王御方

16 すこけに風の竹になる暮（くれ）　中務卿宮

17 世間につたへてもらす名もつらし（の中に）　甘露寺中納言

18 はかなたちてもかきなせる文（書・）　資能朝臣

19 よむ哥の難波津をたにたとられて（つ）

20 いたりふかきはまなふ道々　秀房朝臣

21 法に人耳とからぬをいかゝせむ（みゝ・ん）　重親朝臣

22 まよはゝこの身つみおもかなり（此・）　親王御方

二折表

23 うきは世のましらひかなと捨もせて　新中納言

24 たちくたれるをなけく折々　甘露寺中納言

25 いとねたくまけてやましの中なれや　民部卿

26 おもひさまさん時のまもなし　冷泉前中納言

100　時うつりてもみちはたえめや　絶・

付墨二十五句候

大永元年九月十三夜

源氏詞連歌

初折表

（陽）

1　照りそふやもみちこきませ秋の月

2　そゝろさむきにわたるかりかね　寒・　雁・音

3　衣うつきぬたのひゝき風立て　砧・・

4　やとはあなかま瀧のもとなり

（　）内稿者注。

（陽）の傍線は朱。

傍点線は私に付した。

（後柏原天皇）

親王御方（知仁親王）

中務卿宮（貞敦親王）

民部卿（甘露寺元長）

5　はれやらぬ嶺の八重雲暮るゝ日に　晴・　やへく

6　道の空なるいりあひの聲　みち　相・　こゑ

7　馬とものいはゆる野邊を分けまよひ　へ

8　こゝろよけにもおふるわか草　心・・

初折裏

9　吹かせにおきふしなひく柳かけ　起・

10　川よりをちにかすむひとむら　一・

11　はこひをく柴ふるひ人舟さして　運・　置・

帥大納言（三條西公条）

秀房大納言（萬里小路秀房）

冷泉前中納言（冷泉永宣）

甘露寺中納言（甘露寺伊長）

新中納言（上冷泉為和）

重親朝臣（庭田重親）

86 なきねになかきよをやあかさん

87 身のむかし思ふ枕をそはたて、
昔・・

88 はちすのうへのねかひなとなき
蓮・・ そ

89 水きよき池の心の涼しきに

90 岩によりゐてねふるをし鳥

91 松に藤花の羽やかけぬらん
ちきり はな契

92 見えわたさる、つ、し山ふき
み 吹・

名残折裏

93 春のくれたと〳〵しくはかすまぬに
暮・

94 きりふたかりぬ秋のわかれ路
ち

95 わすれめやまほりなれにし月のかほ
忘・・ 馴・

96 きぬたうちはへいく夜まつらん
幾・

97 なりはひを思ふはしつか心にて
賤・

98 こまのあたりのうりはめさまし
瓜・

99 をのかししさく五色の夏の草
、

72 春と秋とにめつるあらそひ

73 山かくれ槙たつかけは時しらて　陰・

74 よしある庵にすつる身はたれ　有・

75 いつくにもすめはすみつく世のならひ　住・　慣・

76 おひさきみゆるみつくきの跡　水・　水・

77 分る野にまたはつかなるつく〳〵し　わく

78 かすみのまよりけふるわか草　間　若・

名残折表

79 しら雪ののこれる道はかくろへて　白・　残・

80 なをいてかてに冬こもる里　出　ふゆ　さと

81 難波つやいみしく風の吹まさり　なには　津　増・

82 浪のひゝきはかたもさためす

83 はる〳〵と都はなれて行舟に

84 うらやましきは雁の玉つさ　かり　札・

85 こひわひぬ袖とふ月もしるへせよ　恋・

恋・侘・

58 まほにもあらすよその面影（かけ）

59 かひまみや恋のはしめと成りぬらん（い・始・・な）

60 まよふかすみにこもる北やま（きた山・山・）

61 青雲に花の木ともの色かへて

62 春さへまつそにる物もなき（似）

63 ひやゝかに風や秋をはしらすらむ（ん）

64 また影かくす月の夕くれ（かけ）

三折裏

65 をのれたにすこけに鹿の野に鳴て（しか・なき）

66 さとはなれなる道のはるけさ（みち杳・里・）

67 つり舟のかすまさり行すまの浦（釣・数・釣・うら）

68 耳かしかましあまのさえつり（海士）

69 村とりやはねうちかはしわたるらん（鳥・羽・打・羽・）

70 とはぬにつけてうれはしき暮

71 ことさまにちきりかはるか人こゝろ（契・契・）

44 す、　音・　聞・
念珠のをとこそすこくきこゆれ

45 寄・ゐ
けうそくによりぬるや身の力なる
ゐ

46 心地・
いともこゝちのなやましきころ
心・　比・

47 詠・・
いつまてかなかめくらさん物おもひ
思・・

48 あやしく袖そぬれまさり行

49 陰とへはえならぬ花の露ちりて

50 所・・　かほ　鳴・
ところえ顔に来なくうくひす
所・・　かほ

三折表

51 早・
里かけてはやけしきたつあさ霞
気色・　朝・

52 山かさなれるかたそへたゝる

53 遠・　る
道とをく柴ふりひ人かよふらん
る

54
雪うち散てあらましき風
ゝり

55 波・　茲・
浦なみもたゝこゝもとは氷つゝ

56 尋・　入・うみ
千いろのそこをしらぬいり海
尋・　底・

57 つなて長・
引すくる舟の綱手のなかくして

29 老てさへかふりいたゝくゆへ有て　故・

30 えさらぬみちとつかへ来ぬらん

31 九重につもれる雪のところせき　積・

32 そゝろさむくもなれるあけかた　寒・　明・

33 ねぬるまに　間　ぬきすへしたるから衣　ぬきすへしたるから衣

34 かへすゝもしたふわかれそ

35 こまやかに又あふ事をかたらひて　逢　こと　逢

36 さもらうたけにみゆるよそほひ

二折裏

37 かつちるもにほひことなる梅の花　散・　匂・　匂・　はな

38 さまかはりたるやなき松かえ　柳・・

39 立ましる春のあそひのまりの庭　遊・　場　鞠・

40 まさこにくつそひゝきあひぬる　真砂・　沓・

41 うちしきる夕の鐘に友のきて

42 むかひのてらをたのむおこなひ　寺・　行・・・

43 ならひよむ経をかた手と住庵に

14 ひたすらすてすおもふおなし世　捨・同・思・同・

15 あらましのゆるゝかなるにとしたけて　年・

16 いむ事は身にたもつともなし　こと

17 うきみるもさまかはりたる神つかさ　司・・ち わ

18 くろ木の鳥井これや野の宮　黒・とりゐ 黒・

19 月影のかたふきかゝるさかの山

20 ほろ〳〵とおつる木ゝの下露

21 紅葉はのみたりかはしく風吹て

22 ゆふへの色そさう〳〵しかる

二折表

23 とはるやと物とをからてすまははや　遠・やな

24 となりのけはひほのかなるやと　宿・

25 垣ねにはされたる竹の生しけり　根

26 はひひろこれる松のひとかた

27 なかき代のいのりをかけて住よしや　祈・・吉・

28 神のたすけをたのむ身のはて　果・

源氏詞連歌

（平）　賦源氏詞

初折表

（陽）　夕・

1　時めきぬさもゆふかほの花の紐

（平）　夕顔・・

扇・・

2　たれもあふきそ手まさくりなる

照・

3　けふは猶てる日こよなうあつくして

照・

4　わけいりてこそ山はかげなれ

5　旅のやとたとりよらむもしらぬ野へ

邊

雨・

6　をとしめやかにふりいつるあめ

雨・

霞・

7　かすむかとおほめく月のうすくもり

曇・・

空・

8　えんなるそらや春のあけほの

明・

初折裏

鳴・

9　あまたゝひなきつゝ雁のかへるさに

帰・

10　見すてかたきはさくらさく山

桜・・

散

11　散まてもつとそひゐたる花の本

下

有・

12　ありふるまゝにうきはならひそ

何・　恨・・

13　かゝつらひなにかうらむるたえし中

絶・

源氏詞連歌の本文と出典
―源氏物語原典の受容をめぐって―

安達敬子

室町期連歌における源氏物語の重要性を端的に示す一例として、二種の「源氏詞連歌」なるものが現存している。

一つは文明十四年（1483）六月二十二日、後土御門天皇の独吟源氏詞百韻で宗伊が加点したもの、もう一つは大永元年（1521）九月十三日の後柏原天皇をはじめとする十二人の堂上歌人たちによる百韻である。これらは百韻の各句にいわゆる源氏詞を読み込んでおり一種の異体連歌である。しかも、和歌ではなく殆どが地の文を詠み込んでいるという点で、連歌表現における源氏物語の受容史のなかでもきわめて興味深い作例といえよう。

大永元年の源氏詞連歌ははやく『大日本史料』第九編之十三に『連歌合集』所収のものが翻刻され、また文明十四年の独吟連歌はその一部が『新撰菟玖波集』に撰入されており、[1] 近年では寺本直彦氏によって「後土御門天皇御独吟源氏詞連歌私注　上下」に翻刻と源氏詞が示され出典と付合の考察がなされている。[2] ただ、私見では源氏詞の認定について寺本氏と見解が異なる場合もあり、大永の源氏詞連歌においても未だ注釈が施されていない。

本稿では、国会図書館蔵の『連歌合集』二十九所収の本文を底本として他の伝本との校異を示し、各句の源氏詞の出典を考証したうえで、二種類の「源氏詞連歌」の付合の性格を比較しそれぞれの百韻の特質や同時代の和歌、連歌との交渉を考察したい。

源氏詞連歌二種翻刻

底本・・国会図書館『連歌合集』二十九巻所収。

校異・・（陽）―陽明文庫『古連歌異躰』所収。

（平）―京都大学附属図書館平松文庫『集連』所収

（文明連歌のみ）。

文明連歌で源氏詞と考えられる箇所には点線を私に付した。

文明十四年　六月廿二日

御獨吟　宗伊點

御點之内

〈長可給候